



Official journal of the  
Japanese Society of Psychiatry and Neurology

# Psychiatry and Clinical Neurosciences

PCN だより Vol. 72, No. 11

Psychiatry and Clinical Neurosciences, 72 (11) は、Review Article が1本、Regular Article が2本掲載されている。国内の論文は著者による日本語抄録を、海外の論文はPCN編集委員会の監修による日本語抄録を紹介する。また併せて、PCN Field Editor による論文の意義についてのコメントを紹介する。

## Review Article

Violence towards people with mental illness :  
Assessment, risk factors, and management

V. Bhavsar\* and D. Bhugra

\*1. Department of Health Services and Population Research, King's College London, 2. South London and Maudsley NHS Foundation Trust, Maudsley Hospital, London, UK

精神疾患患者に対する暴力：評価、危険因子、および管理

【目的】暴力は、臨床医、公衆衛生、および被害者にとって重大な問題である。精神疾患患者は、一般集団に比べて、暴力の加害者となるリスクが高いだけでなく、被害者となる頻度も高い。一方、臨床現場において、暴力による被害の評価および管理に関する指針は十分に示されていない。【方法】精神疾患患者の暴力による被害について、臨床文献および研究文献のレビューおよび統合を行った。【結果】被害を受けた患

者の精神状態の評価では、履歴に関する諸因子（暴力被害のパターン、時期、加害者の特性、背景因子など）と、臨床的因子（感情および認知の変化など）の双方について検討すべきであることがわかった。【結論】飲酒、支援の欠如、社会環境など、暴力に対する脆弱性が上昇する因子に、臨床および政策の両面から注意を向ければ、転帰は改善すると考えられる。

## Field Editor からのコメント

精神障害者の暴力加害者としての問題が取り上げられることが多いなかで、本論文は被害者としての問題に注目した重要な研究です。暴力の対象となりやすい要因や、リスクを軽減する方策などについて、被害の評価方法、リスク要因の解析、施策的対策を論じた総説です。ユニークな視点で、かつ精神障害者の人権侵害 (WHO 10 Facts) という重要なテーマを扱った、新しい領域のさきがけとなる論文です。

### Regular Article

Longitudinal characteristics of resilience among adolescents: A high school student cohort study to assess the psychological impact of the Great East Japan Earthquake

*J. Okuyama\**, *S. Funakoshi*, *H. Tomita*, *T. Yamaguchi* and *H. Matsuoka*

\*1. Department of Disaster Psychiatry, International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University, Sendai, 2. Department of Psychiatry, Tohoku University Graduate School of Medicine, Sendai, 3. Medical Care Bureau, Miyagi Psychiatric Center, Natori, 4. Department of Community Psychiatric Medicine, Tohoku University Graduate School of Medicine, Natori, Japan

青年におけるレジリエンスの縦断的特性：東日本大震災の心理的影響を評価するための高校生コホート研究

【目的】レジリエンスは、災害や人生の逆境に対処する能力であり、被災した人々のメンタルヘルスを研究するには重要な要素となる。被災地域のコミュニティにおいて、高校生は特徴的なレジリエンスをもっていると考えられるが、この問題についてはほとんど報告がなされていない。本研究は、大災害の影響を受けた高校生のレジリエンス特性に関する知見を得ることを目的としている。【方法】2011年東日本大震災に被災した名取市の高校生760名を対象とし、2012年に入学した254名の生徒を対象に3年間の縦断研究を実施した。10項目版Connor-Davidsonレジリエンス評価尺度を用いてレジリエンスを評価した。また生徒の精神的健康を評価するために、簡易抑うつ症状尺度(Quick Inventory of Depressive Symptomatology)、Zung自己評価式不安尺度、および改訂出来事インパクト尺度を使用した。【結果】2012年に高校に入学した学生のうち、高いレジリエンスを示した割合は28.6%で、2013年には42.9%、2014年には46.6%に増加した。3年間、時間の経過とともに簡易抑うつ症状尺度と改訂出来事インパクト尺度のスコアは有意に減少したが、Zung自己評価式不安尺度のスコアに有意な差は認められなかった。【結論】青年のレジリエンスの特性を初めて調べた本研究から、逆境に直面した

集団の精神的健康を構成する要素のなかでもレジリエンスは大きく変化しやすい要素であることが示唆された。レジリエンスの状態は逆境からの回復の程度の有益な指標となりうるとともに、レジリエンスの改善を目標に介入を行うことが精神的健康の改善に向けて有益であるかもしれない。

### Field Editor からのコメント

- 本論文は、東日本大震災で被災した高校生を対象にした前向きコホート研究で、被災後にレジリエンスの高い生徒が増えていったこと、さらに、同時期に心的外傷体験に関連した症状は減っていったことを報告しています。著者らは結果を通じて、回復力の評価の重要性を支持しています。

### Regular Article

Identification of neurophysiological biotypes in attention deficit hyperactivity disorder

*B. Barth\**, *K. Mayer-Carius*, *U. Strehl*, *A. Kelava*, *F. B. Häußinger*, *A. J. Fallgatter* and *A. -C. Ehlis*

\*1. Psychophysiology and Optical Imaging, Department of Psychiatry and Psychotherapy, University of Tübingen, Tübingen, 2. Graduate School of Neural and Behavioral Sciences, University of Tübingen, Tübingen, Germany

注意欠如・多動症における神経生理学的バイオタイプの同定

【目的】注意欠如・多動症(ADHD)にみられる神経生理学的変化が、異なる病因経路によって異なるバイオタイプを呈するADHD症状の根底にある、という知見が提唱されている。そこでわれわれは、神経生理学的なさまざまな逸脱が、ADHDの明確な神経生理学的特性を裏づけるのかを明らかにすることにより、エンドフェノタイプ概念の直接的なエビデンスを示すことを目的に研究を行った。【方法】ADHD成人患者87名を対象に、神経生理学的バイオタイプについて、クラスター分析を用いて検討した。解析対象パラメータは、血行動態データと電気生理学的データの両方とした。結果を検証するため、クラスターの独立変数を健常対照と比較した。【結果】クラスター分析から、①注

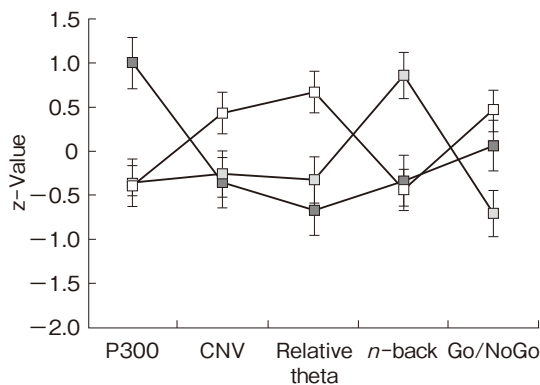


Figure 1 Neurophysiological characteristics of patients in (■) Cluster I, (□) Cluster II, and (□) Cluster III. Mean values of the oddball P300 amplitude (at electrode site Pz), mean amplitude of the contingent negative variation (CNV) at frontal, central and parietal sites, mean relative frontal theta, mean hemodynamic response during  $n$ -back ( $n$ -back) in left and right Brodmann area 9, and mean hemodynamic response during the Go/NoGo task (Go/NoGo) in the right inferior frontal gyrus. Error bars represent the standard error of the mean.

(出典：同論文, p.840)

意配分に平均を上回る機能を示すバイオタイプ、②注意配分および抑制制御に困難がある一方で、ワーキングメモリ課題遂行中の前頭葉活性化が高いバイオタイプ、③状態制御に機能障害を示すバイオタイプ、という神経生理学に基づく3つのADHDのバイオタイプが示された。【結論】ADHD患者を神経生理学的バイオタイプに分類することにより、病因経路が解明され、診断および（個別化された）治療選択肢に関するさまざまな示唆を得ることが期待される。

#### ■ ■ Field Editor からのコメント

- ■ 本論文は、ADHDを神経生理学的に検討し、クラスター分析を行うことで、異なるエンドフェノタイプをもつ3つのサブグループに分けられることを提唱しています。このように分類することで、今後、病因論的診断が可能になるとともに、個別化した治療を行える可能性も考えられます。